誤算

女弁護士はハードボイルド

　地味な紺色の傘を地面へ向けてすぼめると、雫が一斉に垂れはじめた。女はレインコートに付着した十一月の冷たい雨を気にしながらそのビルの扉をあけた。
　小さくて暗いロビー。彼女は壁に取りつけられている掲示板を見上げ、目的の会社のフロアをたしかめると、エレベーターにのった。扉がクローズされる寸前に用務員風の男が駆けてきて手をあげたので、女はボタンを押し、扉をあけて待った。男はしきりに恐縮し、女よりも低いフロアのボタンを押した。
　さてこの中年の用務員は本編にはなんら関係のない男であるが、彼が世間一般の男よりも、もう少し思想行動が下品にできあがっており、隣に肩を並べている――実際には五センチくらい男の背は低かったが――ヒロインの容色風貌を彼の視線を通して観察するのも悪くない趣向だろう。なぜならそうした視線こそ、作者および読者の視線と同じ位置にあるものと考えられるからだ。
　――男は目玉をチラチラと横へふらつかせ、明滅しながら昇っていく電光掲示を見つめている女の横顔をうかがった。髪は長く、今風にソバージュにしているが、そ

れを一本に束ねて背中へおろしているため、美しい耳の形や繊細な首筋やうなじのほつれ毛まですべて拝めるのだった。
　しかし狭い箱のなかに二人きりとなって、初めて感じたのは視覚からの女の情報ではなく、嗅覚を刺激する香水の匂いであった。彼には詳細な香水の知識が欠けていたので、作者が補足すれば、それはシブレー系のミスディオールという香水で甘さのなかにもしぶさが混じり、大人の、キャリアウーマンがよく好む香りなのだった。なるほど、男が睨んだところによると、女の年齢は三十前後である。肌の艶や張りはいまが女の盛りといっていいほど、瑞々しく、しかもしっとりと落ち着いていて、男心をそそってくる。それでいて、面がまえにはちょっと人をたじろがせるような理知美と威圧感といったものが備わり、かなりの知能の明晰さと社会的地位の高さからくる自信を感じさせるのである。
　額は広く、生え際がシャープに角張っている。これは現代的美女のひとつの要素といえるものだ。目はやや切れ長でどちらかといえばエキゾチックな印象をあたえ、もし、女に性的な下心があればそこに濃い目のアイシャドウを引き、妖艶さを演出することは簡単と思われた。鼻筋には癖がなく、小鼻の肉が薄くて涼しげな高さを誇っていた。唇は大きめだが、自覚があるらしくルージュは控えめでローズピンク系のうすい色をぬっている。全

体的に化粧は押さえており、ほのかな香水の薫香にその匂いは紛れてしまいそうなほどだった。
　男はこの知性的な容貌がセックスの時にどんな表情になるかを想像し股間を熱くさせた。この種の男にとって――つまり我々にとって――女が誇り高く、有能であればあるほどそのベッドの行為をあれやこれや思い浮べるのは何にもまさる楽しみであり、執着する事柄なのだ。白い肌にソバージュの黒髪がすべり、跳ね、まとわりつき、その中にうずもれた美貌は半眼で、濡れた瞳を覗かせつつ、ときおり口をいっぱいに広げて己れの昂奮を大声で男にしらせる……美貌はむろん薔薇色に火照っており、汗でびっしょりだ……眉間や鼻筋には苦しげな小皺が何度もきざまれ……首をせつなそうに振りたくる……
　中年男は我を忘れてじっとりと女を凝視している自分に気づいて慌てて電光掲示に視線をそらせた。女は悟っただろうか？　いや、大丈夫だろう。こういう美人は男の淫らな視線に嬲られるのが日課になっているだろうから、不感症であり、それほど神経質には感じないにちがいない。
　男のおりるフロアが迫っている。男は女のプロポーションを是非とも吟味したいと願った。美人と二人きりで乗りあわせる機会などそうあるものではないのだ。女の寛容さを頼みに、男は恐る恐るもう一度、横目になった。

　レインコートを着ていたが前のボタンははずしており、中はそこそこかいまみることができる。片手に黒塗りのアタッシュケースと傘を一緒にもち、片手をコートのポケットに無造作につっこんでいた。
　コートのなかはきっちりとしたテイラードスーツだった。白襟を黒のジャケットからだしていかにも颯爽としている。ミニスカートを期待したが膝上まではいっていない。それでも足を組み替える際にコートの裾からあらわれるそれはブラウン色のストッキングに包まれて細く、スラリとしている。
　なんとか、コートとスーツの厚いベールに阻まれている女の肉体の線を想像しようとした。肩の位置――パットが入っていることに気をつけて――、腰の位置、胸のところのたわみ具合、エレベーターの後の壁に押しつけられている臀部の丸みよう……。
　だいたいの女体図が脳裏に焼きつけられた。かなりの豊満さが期待できる。よだれが垂れてきそうだ。さあ、一枚一枚、脱がしていこう。コートをとり、ジャケットを腕から抜き取り、白いブラウス姿にする。豊かな双乳がグンと盛りあがっている。ブラウスのボタンを一つひとつ外していき、いよいよ下着と柔肌が露出されてくる……。
　「つきましたわ」
　「ン？」

　女が前を指さした。とっくにエレベーターの扉がひらいていた。愕然とする中年男。ヌードショーに没頭していたために周りの景色がすっかりなくなっていたのだった。
　女は口元にかすかな微笑をたたえ、『開』ボタンを押しつづけている。その微笑は苦々しい思いとほんのちょっとの悪意とで成り立っているようだった。
　男は背を丸めながらコソコソと降りていこうとしたが、イタチの最後っ屁とばかりにさっとふりかえり、閉じようとしている扉の狭間で女の正面からの姿を網膜に焼きつけた。扉がしまっても彼の心にはエッチングのような彼女の姿が蘇ってきて、しばし楽しめた。だが、彼女のスーツの襟元になにやら金色に光る丸いバッジがあったのに気づき、さてあんなバッジはどこかで見たものだが、と首をひねった。そうそう、思い出した。それはテレビの二時間ドラマの、『女弁護士なんたらかんたら』というシリーズで主人公の女優が付けている弁護士の身分を示すバッジにそっくりだったのではあるまいか。とすると、あれはひょっとして本物の女弁護士！
　ひぇーっと中年男は嘆息してふりかえり、電光板を見上げた。生の弁護士を見るのが初めてだから、もちろん女弁護士も初めてだ。しかもかけ値なしの美女ではないか。
　（美人弁護士だぜ……）思いもかけない希少種動物に

出会った昂奮で男はすぐにでも同僚に吹聴したくなった。掲示されている数字の明かりが動かなくなった。
（八階……？）
どんな会社が入っているか、なかなか思い出せない。たしか、ひとつの会社がワンフロアを借り切っていたはずだ。
ギガス・エンタープライズ――そんな名前の会社だった。どうせいかがわしい企業だろう。男は想念のなかに勝手にドラマを展開させる。
（悪徳企業対美人弁護士か……いよいよ痺れてくるじゃないの！）
ヒヒヒと下卑た笑みを浮かべながら彼は小走りに同僚の待つ控え室へ向かった。
この助平オヤジはもう二度と女の姿を見る機会はなかったが、我々はさっそく彼女の尾行を続けよう。
エレベーターを下りた女は狭い廊下に天井までぎっしりと積み上げられた段ボールの山の中を身体を横にしながらすり抜けていった。女の豊かな腰が段ボールにぶつかり、邪魔をしているように見える。
ようやく彼女は廊下のつきあたりの『ギガス・エンタープライズ』と印字されているスモークトガラスの前にたどりついた。そこは病院の受け付け窓口のようになっており、ブザーを押すと、ガラスが開き、係の人間が顔をだす仕組みになっている。できるだけ人を寄せつけた

くないうしろぐらい企業のとるシステムといえる。
　ブザーを押してもなかなかガラスは開いてくれなかった。女はせっかちな性格らしく、しつこく何度もブザーを押しつづける。
　叩きつけるようにガラス窓が開いた。敵意丸出しのオバチャンがヌッと顔を突きだし、三白眼で女を睨みつける。オバチャンは機嫌は損ねたように無言であり、用件があるならそっちから言え、こちらから問うなど真っ平御免だと、強固な意志に貫かれているようであった。赤茶けた薄い頭髪にパーマをチリチリにかけており、エラの張った骨格の顔だ。ドングリ目に団子鼻、ヤケクソの厚化粧が醜怪さに輪をかけていて、ひょっとしたら一度も男の好意的な視線をもらった経験のない人生を送っているのかもしれない、と想像させた。若い美人への応対が厳しくなるのはしごく当然なのだ。自分の不幸のすべては世の中に存在する美人のせいだと決めつけてかかっている。目の前のレインコートの女こそ、その代表格といえるのだろう。
　オバチャンは無言で睨みつづけた。
　女はそれをあっさりと黙殺し、ちょっとハスキーがかった声で言った。
　「さきほどお電話しました、杉内法律事務所の者です。弁護士の中澤と言います。大道専務にお取次ください」

　オバチャンは弁護士という言葉にはちっとも驚かなかったものの、女であったことは意外だったらしく、さらにしげしげと中澤なる女弁護士の容姿を眺めまわした。敵意はいっそうつのったようだ。美貌のうえに頭脳すら自分とは桁外れの出来具合なのだ。しかし、専務の名前を持ち出されては受け付けの身でなしうるひねこびた意地悪もここまでのところである。
　「ちょっとお待ちください……」
　ガラスがビシャリと閉められた。しばらく待たされたあと、受け付けの窓の横のドアが開いた。中からブルーのワイシャツにネクタイ姿の少壮の男性があらわれた。ラクビー選手のようにがっしりとした体格だ。髪は短く角刈り風に整えられており、その鋭い眼光とともに威圧的な雰囲気をたたえているのだった。
　「これはどうも。雨のなかわざわざおこしいただきまして。わたくしが専務の大道です」
　地を這うようなだみ声だ。丁寧さはよそよそしく、女弁護士が招かれざる客であることを示している。が、ここでも彼女は明確な相手の心底を無視して平然とした顔つきである。
　「弁護士の中澤真弓です――」
　自己紹介を終えると中へ導かれた。殺風景な事務所である。部屋のほとんどが段ボールで占領されている。事務机はふたつみっつしかなく、従業員はなし。あのオバ

チャンもいない。机のうえにパソコンが置かれているだけだ。いったいこの段ボールには何が入っているのだろう。真弓がさして驚いた様子でないところを見ると、彼女にはその中身がなんであるか、見当がついているのかもしれない。
「別室で社長以下、会社の重役陣が待機しております」
事務所をどんどんと横切りながら大道専務が言う。真弓は無言でうなずき、彼の大きな背中を見つめながらつづいている。
専務はひとつのドアを開いた。そこは社長室でも重役室でもなく、単なる小部屋である。ロッカーがあるところを見ると更衣室なのかもしれない。あまり使われているようにも見えないが。
「ここでコートをお脱ぎください。それから必要最小限の書類と筆記用具だけをお持ちください。それと簡単なボディチェックをさせていただきます――」
真弓が何か言いかける前に、大道は扉の向こうに出ていってしまい、代わりに彼よりもさらに背の高い女が入ってきた。軽く百八十センチは越えているだろう。背だけではなく横幅もある。尋常でない首の太さからさっするに何か格闘技の経験があると思われた。暖房もほとんど効いていないのに半袖のＴシャツ一枚にスラックスなのだが、それらは盛りあがった筋肉に今にもビリッと破

けてしまいそうである。顔は不良娘をそのまま歳とらせた顔だ。その時のニキビまでまだ頬にとってある。ショートヘアだがちっとも似合っていない。化粧っ気はまるでなかった。
　彼女の背後からさきほどのオバチャンがひょっこりとあらわれた。オバチャンのほうは百五十センチそこそこなので、大女の上背が余計目立ってしまう。
　「ずいぶん、厳重なのね」
　真弓が皮肉な微笑を浮かべながら言った。
　「プルトニウムでも隠しているんじゃないのかしら」
　「早くしないと約束の時間がすぎてしまうよ」
　初めて大女が喋った。太い声だ。太い首に共鳴しているような声。
　「そっちから強引に会わせろと言ってきたんだろ。みんな、忙しい時間をやりくりして集まっているんだからね。少しでも待たせるような真似は失礼にあたるじゃないか」
　真弓は少し濃い眉を額のほうへあげて、あらまあ、という表情をする。
　「みんな、来てるの。でもまさか、会長は来ていないでしょう？」
　「うるさいね。つべこべ言わず、さっさとコートを脱いでそこに吊るしな」
　大女は少し苛ついて組んでいた腕をほどき、腰につく

と、胸を張った。なかなか迫力があるのはたしかだ。真弓は首をすくめながら苦笑すると、コートを脱ぎはじめる。
　彼女の背後を通ってオバチャンが反対側へ回りこみ、真弓を挟んだ。オバチャンは団子鼻をクンクンと蠢かせ、からかうように言うのである。
　「最近の弁護士は香水をつけてるのかい！　まったく世のなかどうなってるんだろうねえ！」
　「競争が激しいんだよ」と大女。「客引きのためにはフェロモンを発散させないとね」
　「なんだい、そのフェ、なんだかってのは？　あたしにはさっぱりわからないよ。だけど、そう言えばこの女、いや、この弁護士先生、どっかのクラブの女みたいに色っぽい顔をしてるわ」
　そうとう遊んでるんじゃないの、と言いたげなのは明白だったが、真弓は努めて相手にしなかった。ロッカーのなかのハンガーにコートをかけ、傘をたてかけた。全貌を現した彼女のスーツ姿はいかにもバリバリの弁護士の凛々しさである。ウエストが絞り込まれたスーツは必然的に胸と腰をダイナミックに見せている。インナーのブラウスの胸は巨乳を予感させる盛りあがりではないものの、たわわに熟れた柔らかい肉丘を約束しているようにも思える。それよりも強調すべきは腰、ヒップ、臀部だ。タイトなスカートはその丸みをきわだたせ、女性ら

しさ、だけでは表現が足らない、そう、官能的と言い切ってもかまわない、曲線美をみせているのだった。普通の男だったらふるいつきたくなるような、痴漢であれば撫でまわさずにはおかない、スパンキングマニアであれば平手打ちせねばおさまらない、浣腸マニアであれば嘴管を谷間に差し込むことを夢想しないわけにはいかない、プリプリ、ムチムチのお尻、おケツ、双臀である。
　二人の同性の観察者さえ、視線を奪われ、しばし見惚れるくらいなのだった。
　アタッシュケースから書類にメモ帳、ボールペンを取り出すと、真弓はロッカーの扉をしめた。
　「そこに立って、両腕を万歳して」
　「そこまでやる必要、本当にあるのかな？」
　ボディチェックまでしようとする彼らの変執的なまでの懐疑主義にからかい半分の疑問を口にする。
　「ふん、それがあるのさ。いつだったか、テレビ局のレポーターが取材にきたとき、隠しマイクや超小型カメラを持ち込んでいてね。気がついたからいいようなものの、あぶないところだったよ。あれから警戒は厳重にすることになったのさ」
　「そのレポーター、どうなった？」
　「さ、いいから手を挙げて！　協力しなくてもかまわないけど、その場合はこっちも会見を拒否するまで。どーするの？　暇じゃないんだから、さっさと決めなさ

い」
　ハイハイと真弓は不請不請、両手をかがけていく。理不尽な要求をされても従わざるをえない理由が女弁護士にはあるのだろう。両手が肩の高さで水平になると、彼女はそこで動きをやめたが、大女は邪険にその手を跳ねあげ、しっかり頭上までのばさせるのだ。ジャケットが持ちあがり、ブラウスの腹があらわになる。胸の位置も高くなった。
　正面に仁王立ちしてしばしこちらを吟味している大女に気をとられていたが、背中にピタッと手のひらが張りついてきて、真弓は電流が走ったような悪寒にとらわれた。
　「動くんじゃない！」
　オバチャンの厳しい声。オバチャンはふたつの手のひらで柔らかい肉のなかの硬い肩甲骨をさぐりあて、まわし揉みするように圧迫した。思わず、かかげた両手が下がってくると、大女はキンキンする声で叱責する。
　「不服ならここで帰るんだよ！」
　「万歳なんて日頃したことがないから疲れるのよ。早くすませてほしいわ」
　真弓の声はあくまで冷静だ。しかし冷静で、ハスキーな声とは、本人の意図にかかわらず憎々しい印象を人に与えるもので、大女を必要以上に刺激しているようである。

「それじゃ、二人がかりでやってやるよ！」
　彼女は陰険に目を光らせる。まさにグローブ大の手が真弓の頭に乗せられた。後ろへ束ねている頭をわしづかむと、グラグラと揺さぶった。頭髪のなかの隠匿物を探査するよりも、本人に苦痛を与えるがためだけの行為である。真弓の眦がやや吊り上がるのをみて溜飲が下ったのか、彼女は頭を放し、指をポニーテールのしたのうなじに這いこませる。そこをまるで愛撫するように十本の指で撫でまわし、美人弁護士に屈辱の鳥肌をたてさせると、ついで、ポニーテールの根元を握りあげ、それを彼女の顔の前へ跳ね落とした。ソバージュの軽いウエーブのかかった一束の黒髪がすだれの如きに美貌を覆った。髪の洪水のなかから高い鼻の頭だけが突き出している。隙間から大女を睨みつけている両眼が熱しきっている。
　オバチャンの手が腋の下をくすぐり、胸へまわってきた。
　「おやまあ、けっこう巨きいおまんじゅうを持ってるわよ、この弁護士先生！」
　オバチャンの頓狂な声に、苦々しく頬を引きつらせる真弓である。
　「Ｂカップかい？　Ｃカップかい？　それともＤ？」
　のれんを分けるように、大女は真弓の顔の前の髪を左右へ広げ、真弓の青ざめた表情を晒しながら詰問する。
　「無意味な質問でしょ」

「バーカ。Ｃカップなら胸の谷間に機械を埋めて隠せるじゃないか。もしＣならブラジャーをとってもらわなきゃならなくなる」
「馬鹿馬鹿しい！」真弓は初めて声を荒げた。
この検査官たちがそのような不当な行為を本気でやろうとしているのでないことはわかっていても、真弓の我慢もそろそろ限界に近づいている。
「あらあら、今まではハードボイルドの女探偵のようにシャアシャアとした口を叩いていたくせに、ちょっとおっぱいをつかまれただけでそんなに昂奮しちゃって。あんた、あっちの気でもあるんじゃないの？」
大女は脂汗が滲んでいる真弓の鼻の頭をチョンチョンとつついた。
「Ｄはとてもないようだよ」オバチャンは真剣に報告する。「Ｃの小さめか、Ｂの大きめか、微妙なところ」
オバチャンの手のひらはスーツの中へ忍びこみ、ブラウスのうえからしっかりとブラジャーのカップを包み込み、むんずむんずと揉んでいるのだ。真弓は首筋にオバチャンの鼻息を感じ、振り返ってキッと睨みつける。オバチャンは背伸びをしてぴったりと真弓の背後に身体を密着させ、頬ずりせんばかり。
「いやらしいね、先生。ハーフカップじゃないのかい？」
オバチャンはニカッと笑った。ハーフカップがどうし

ていやらしいのか、まったくの謎であったが、彼女の手管により、乳肉がそのハーフカップからこぼれでそうになったので、真弓は思い切りオバチャンの足をふんづけてやった。
　「イテテテ。なんだい、ジョークのわからない女だね！　少しは心にゆとりを持ちなさいよ！　おー、痛い……」
　真弓は呆れて吹き出しそうになったが、今度は両足を一メートルの間隔に開くよう命じられた。
　「パンツのなかも探ろうっていうの？」
　大女はニタついている。「探ってほしいんだったらそうしてやるわよ」
　ふんと横を向く真弓。
　「パンツじゃないだろ。パンティだろ」
　オバチャンは真弓の丸々としたヒップを平手打ちした。
　「あっ……」
　真弓は足を開いたまま一歩前へ飛んだ。
　「さ、大根足を調べてやるからね！」
　オバチャンはその場にかがみこむとヒールに腱を浮きたたせている真弓の足首を握る。オバチャンの手でも人さし指と親指が向こう側でくっつくほどの細さである。ふくらはぎは緊張しているためか、硬くしまっており、ストッキングを通してでも陶器のようなその感触がわか

った。色白の肌をブラウンのストッキングは妙に艶かしく包んでいる。膝のお皿はコリコリとし、小さい。現代人の魅力的な足の代表例といえよう。
　スカートのなかにまで侵入してきたのはほんの一二秒だったので、真弓は足を閉じあわせる間もなく、しっかりと太腿の内側を抓られてしまった。
　もう一度、お尻をピシャリとやられ、身体検査はようやく終了となった。
　スーツの乱れをなおし、頭髪を撫でつけて、道具類を手にする。
　「よーし。いい子にしていたから楽しいところに連れてってあげるよ！」
　飼い犬に説諭するように人さし指を真弓の鼻先につきつけ、額を軽く突き押した。真弓はその手を毅然としてはらいのける。
　「お遊びはこれまでよ！　これからは大人の時間。さあ、まともに日本語を喋れる相手のところまで案内なさいな！」
　真弓の威勢のいいたんかにたじろぐ大女とオバチャン。真弓は更衣室のドアを自らあけてさっさと出ていこうとする。彼女の行く手をさえぎるように大道専務が再登場した。
　「お手数かけました」と軽く会釈する。
　「面白い動物を飼っているようね。餌代だけでもけっ

こうなもんでしょう」
　二人の女に聴こえるように大声で言う真弓だが、大道はほとんど表情を変えなかった。　「なにぶん機密性が命の会社なものでして。――こちらです」
　真弓の前に立ち、のしのしと歩いていく。
　真弓は振り返り、こちらを忌ま忌ましげに見送っている大女とオバチャンにアカンベエをしてみせた。

　　ギガス・エンタープライズ

　ギガス・エンタープライズの被害者が杉内法律事務所に駆け込んできたのはおよそ二ヵ月前のことである。事件はよくある悪徳商法のたぐいだった。販売員をつのり、顧客の誘引の代償に手数料を渡すネズミ講のような仕組みなのだが、この『のような』のところがミソである。ネズミ講そのものはすでに法律によって違法行為になっているのだが、悪徳業者も手をかえ品をかえ、法の網をくぐり抜けるシステムを構築してくる。その新しいシステムを罰する法律が出来るといったんは下火になるものの、ほとぼりがさめた頃になると、またどこからともなく蘇ってき、そしてダマシの手口はまたちょっと巧妙に違っていて古い法律は無力化し、新しい立法の必要性が叫ばれる、と、まさにイタチごっこの繰り返しなの

だ。
　イタチごっこの繰り返しのたびにおびただしい数の被害者が産み出される。彼らは財産を奪われ、友人を失い、職場すら失って路頭に投げ出される。中には自ら命を絶つような最悪のケースも起きる。この手の事件が公になると、よく耳にするのは『騙すほうも悪いが騙されるほうも悪い』とする世間のリクツであるが、そもそも騙すほうはプロなのに騙されるほうはアマチュアだという現実を知らなくてはなるまい。冷静になればほとんど価値のない壷や美術品やその他もろもろの商品をいかに高価で必要性のある品か、詐欺師たちは長年の経験や豊富な法律知識を駆使して被害者たちに吹き込み、従順な信者としてからめとる。それは催眠術のようであり、洗脳のようでもあり、まさにプロの技なのだ。被害者たちは彼らのしもべとなりあるいは手先となり、新たな信者を捜して街中をかけずり回る。数学的に不可能な数字を弾きだす不毛の努力に全精力をつぎこんで、やがて世間のすべてが自分に敵意を持っていることに気づいて愕然とするまでとまらないのだ。
　問題なのは事件が発覚する前に、つまり社会問題化する前に、業者はたっぷりと甘い汁を吸い上げており、司直の手が及ぶ頃には雲散霧消してどこかに逃げてしまう現実なのである。そうなってしまえば、被害者は事実上泣き寝入りするしかなく救済の道は閉ざされてしまう。

もし弁護士として裁判沙汰になる以前に何か役に立つことがあるとするならば、しっかりと敵の正体をつきとめ、事のカラクリを把握し、逃げられないよう、首に鎖を巻きつけておくことなのだ。そうしておけば裁判で勝訴する可能性は高いのだし、和解交渉にもつれこんでも有利に形勢を導けるだろう。

幸い、このギガス・エンタープライズ事件では被害者の背信が早く、まだ業者がじゅうぶんに利益を取り戻す前に事務所に話が持ち込まれた。きっと、悪漢たちはこの悪事を起こすために投資した元手さえ回収していないだろう。彼らは賢いがしょせん金儲けのために行動しているあきらめの悪いハイエナだ。損は絶対に避けるのが本能だ。手が後ろに回る寸前までジタバタと足掻きまわるに決まっている。弁護士が介入してきても逃げるよりも他の手を考えるに違いない。そこが狙い目であった。

中澤真弓弁護士の仕事はまず依頼者である被害者の利益を回復することだ。彼は洗脳を受けたものの、泥沼にはまる前にふと正気に戻り、自分のしている愚かしさに気づいたのだ。よくやったと誉めてやろう。こうした展開はなかなかないのである。彼は自分のアパートの部屋に山のように積み上げられた段ボールの箱――これを売り、その客を会社に紹介するわけだ――をなんとか返却して代金を手元に戻したいと考えた。そう申し込んだところ、素気なく断られ、ちゃんと働け、そうすれば薔薇

色の未来が広がるのだと再教育をほどこされそうになった。なおも返金を要求すると、今度は暴力の威嚇をもって追い返された。殴られはしなかったものの、彼の胸にその恐怖は鮮明に刻みつけられたのだ。
　行き場を失った彼は思案のあげく杉内法律事務所のドアを叩いたのである。法律事務所のボス、杉内洋一はまだ若手ではあるものの、有能であり、この手の問題についても経験のある真弓に担当させたわけだ。
　真弓が調べれば調べるほど、ギガス・エンタープライズは胡散臭い会社であった。まずその本拠地をつきとめるのが骨の折れる仕事であった。被害者たちはレンタルされた貸しビルの一室で洗脳され、忠誠を誓わされる。あとは電話で指示があるだけ。子会員を獲得してきてもまた違った貸しビルの一室へと連れていくだけである。
　辛抱強い内偵の結果、どうやら都内某所にその巣窟がある事実が明らかとなった。同時に首謀者の名前もわかった。会長が大道高順、社長が大道恭順。彼らは兄弟であり、会長が兄、社長が弟。高順のほうはちょっと有名である。１９６０年代から何度かピークを迎えるマルチ商法のばっこの際にかならず暗躍してくる札付きの悪なのだ。何度か刑務所の世話にもなっているはずである。
　いま、真弓を先導しているは高順でも恭順でもなく、高順の娘婿である紀夫であろう。同族がつるんでいるからチームワークも強固なのだ。

　さて実態はしだいに判明してきたわけだが、まだまだその手口はつまびらかになったとはいえない。表面的には辛うじて合法的手段をもちいているのである。真弓としてはもう少し時間をかけて、あわよくばすべてのカラクリとともに、彼らの金蔓をもはっきりさせておきたかった。それはたぶんどこかの金融業者か暴力団ではないかと想像できるのだが……。
　しかしそう悠長なことを言っておれなくなってきた。さっきも話にでたが、あるテレ
ビ局がこの情報をつかみ、取材を内密に進めているらしいのだ。あんな興味本位の連中に土足で踏み込まれては元も子もない。いくら奴らが悪あがきするといってもそれは資金回収の見込みが少しでも残っているときまでだ。彼らは警察よりマスコミを嫌う。なぜならその絶大な影響力は彼らの従順なしもべたちを動揺させ、新たな販路を急速に収束させるからだ。それならかえってそのほうがいいではないか、という意見は甘いといわねばならない。余力を残している彼らはまたすぐに態勢を建てなおし、どこかで同じ事をはじめるだけだろう。被害者が顔を変えただけで不幸の数は少なくならないのである。再生するタコの足に切りつけるのは頭のいいやり方ではない。致命傷を与えるべく心臓めがけてもりを打ち込まなくてはダメだ。
　しかしテレビ局に働きかけてもいっこうに埒が明かな

いとなれば仕方がない。どこかに高飛びされる前にせめて依頼者の取り分だけでも確保しなくてはと、真弓はこうして乗りこんできたわけだ。彼らが彼女の訪問を渋々ながら受け入れたのは不思議ではなかった。まだ、この事業に未練を残している証拠なのである。できるなら弁護士を丸め込んで、時間稼ぎをしようとしているのだ。女弁護士なら御しやすいと踏んだ、ということもあるだろう――もしそうであればこちらとしても動きやすい。実力をみくびってくれるほうが甘い球がくる確率も高いのだから――。

　いずれにせよ、話し合いがもたれなければ一歩の前進もないのだからこちらとしてはありがたい。その条件として彼らが要求してきたのが、マイクやカメラの所持の禁止と厳重な捜査だったわけだが、それくらいなら認めてもかまわない。もっとも、あのボディチェックは論外であるにせよ……。

　（女性弁護士に対する新手の威嚇のひとつかも）

　真弓は内心で嘲笑した。そんなものが通用するヤワな女でないことを、すぐに思い知らせてやる。

　彼女が案内されたのは最初の事務所のほぼ二倍ほどの面積を持った部屋であった。窓がなくこうこうと白熱灯がつけられていたが、換気扇が不調なのかたちこめたタバコの煙りが充満している。

　入り口の正面に横一列に並んで座っているお歴々のメ

ンバー。六人いた。手前の長机のうえに肘をついたり、腕をくんだり、この薄寒いのに扇子でバタバタあおいだりして談笑をかわしていたが、真弓が入ってくると、一斉に会話を中断し彼女に注目する。
「おかけください」
専務が示したのは一一校にあるようなスチール製の椅子と粗末な机である。これがお歴々と中央で相対する位置に置かれていた。なにやら入社試験の面接といった感じ。リクルートの小娘の扱いだ。ヤレヤレと苦笑しながらも、真弓は椅子に腰をかけた。
専務もお歴々の一員となって、向こう側へ座る。
「さてどこから始めたらいいんだろうかね。専務？」
列中央の頭の禿げあがった、恰幅だけはそれなりにある男が言った。扇子を使っている男だ。六十代後半だろうか。
「そうですね、社長――」
と、専務が答えたのでそれが大道恭順であるのがわかった。
「とりあえず、こちらの名前を覚えていただいたほうがよろしいのではありませんか」　「うむ、そうだな。名刺はあとでまとめて渡すことにして。それでかまいませんかな？　中澤先生」恭順は真弓を見、同意を求めた。
「もちろん、それでけっこうですわ」

　真弓はゆったりと椅子の背にもたれ、居並ぶ彼らの顔を見回した。この大仰な会見はどうみても真弓を萎縮せしめようとする魂胆が隠れている。数と押し出しの強さで圧倒してペースに巻き込もうともくろんでいるのだ。
　すべて承知の真弓は余裕のある態度で視線をすべらせていく。
　（いいこと、ヒヒオヤジども！　そんな猿芝居など通用しないわよ。私は世間知らずの主婦や学生とは違うんだから）
　いよいよ戦闘開始だ。そっちが小娘扱いするなら、こっちは家臣にお目どおりしてやる女王を演じてやるまでだ。宣戦布告の真弓の睥睨に、彼らはちょっといやそうな表情をあらわす。ネコダマシの奇襲の立ち合いに、こちらは張り手一発で応酬する。まずは五分の分かれか――。
　「ええーと、こちらがギガス・エンタープライズ社会長の大道高順……」
　恭順に紹介された会長は白髪で和服を着ているために、すっかり老人の風体であるが、眼光は鋭く、老獪にたちまわってきた人生そのままに隙のない雰囲気を漂わせている。
　「専務はもうご存じですね。大道紀夫です。こちらが販売担当の井田。企画の相原、経理の西。そしてセキュリティの菅沼……」

　それぞれが軽く会釈をよこしてくる。それにしてもセキュリティまででてくるとはたいした歓迎ぶりだが、たぶん大道一族以外はサクラのようなものだろうと思う。正確なところは調べてみないとわからないけれど、どいつもこいつも人相が社長や会長とは違った意味で悪く、暴力団員を想像させる。スーツできめているように見えてもお里を隠せない。菅沼などはもろパンチパーマではないか。
　こっちの四人はカボチャと思って無視することに決めた。焦点はやはり大道一族である。
　「ご丁寧にありがとうございました。申し遅れました。わたくしは杉内法律事務所の中澤真弓と申します。お見知りおきを……」
　「お若いですな」とすかさず社長の恭順。「その若さで弁護士でバリバリやっていらっしゃるんだから、さぞかし優秀なんでしょうな」
　「優秀だなんてとんでもない。まだまだ使いっぱしりみたいなものですわ」
　極端な謙遜は皮肉の意が含まれている。使いっぱしりでじゅうぶんな低劣な会社よ、あんたたちは！
　「フフフ、それにとてもお美しい」
　「答えに困ることはおっしゃらないでくださいな」
　「いやいや、かけ値なしの美人ですよ。女の弁護士というからどんな鬼瓦みたいのが来るかと、戦々競々とし

ていたんですがね。しかしこんな美人が弁護士の世界にも進出していたとは驚きですな」
　「日本も豊かになったということじゃよ」
　それまで黙っていた高順が口を開いた。人工的な整った歯並びを見せて喋る。総入れ歯なのだろう。
　「豊かになると美人とゴミが増える。どこの国でも同じじゃ。それが国家の余裕というものじゃな」
　軽い反撃のジャブ。この美人弁護士をつかまえてゴミと一緒にするなんて、じいさん、なかなか言ってくれるじゃない。
　「豊かになると増えるものがもうひとつありますよ」
　「なんじゃね？」
　「なかなか死なない老人の数」
　「ン？」
　一瞬、男たちの表情がとまったが高順が腹を抱えて笑いだしたので再び、扇子がバタつき、紫煙がふきだされる。
　「美人のうえにトンチも働くようじゃ。恭順、今度の弁護士先生はなかなか手強い相手のようじゃぞ」
　兄さん、ここでは社長と呼んでくださいって言ってるでしょう……と恭順が高順に小声で抗議している。それをうるさそうに手をふって追い払い、高順は真弓をじっくりと観察してきた。他の男たちも改めて彼女の魅力的な美貌と豊かな肢体を凝視する。

「ま、とにかく、本題に移らせていただきますわ」
と、真弓は身体や顔にまとわりついてくる蝿のような男たちの視線を足を悩殺的に組み替えることでそこへ集中させ、咳払いをして雲散させた。
書類を開き、事務的に切りだした。
「貴社と契約したる斉藤良夫なる販売員についての一件ですが……」
急に退屈な話し合いになったのでとくにサクラとおぼしき四人組があくびを噛み殺したり、頭をボリボリと掻いたりしはじめた。とくに端の二人――菅沼と西――はひそひそと言葉をかわしている。視線がときおりチラチラと真弓に飛んでくる。小耳に彼らの声もとどいてきた。
「……シャロン・ストーンみたいな真似をしやがって」
「……でもシャロン・ストーンより足が太いんじゃないか？」
「そうそう、下半身はどっちかと言えば、安産体型だよな」
「でも俺はそっちのほうが好きだけどね。ムチムチしてるほうがさ」
「……ククク、あの腰に咥えこまれたら……ムククク……」
「こないだのレポーターは胸が巨きかったけど、今度

のはケツがマルマルとしてやがるから……いずれにせよ……を可愛がってやれば……あの手の鼻の形の女は……の量も多くて……」
　真弓はタバコの煙をはらいながら社長の恭順に問い正す。
　「なぜ彼の要求を聞き入れられなかったのでしょう。しかも暴力的な『示威』行動すら見せつけるとは。まずいんじゃないですか。つまり民法の公序良俗規定に抵触するということですが」
　西と菅沼の、『自慰』だってよ、という声が耳に入ってきたのを無視しながら真弓は鋭い視線を社長の恭順に飛ばした。
　「それは聞いておりませんなあ。専務、どうなってるの？」
　「たしかに斉藤良夫という会員はおりますが、その斉藤良夫から契約解消の申し出は出ていません」
　「それは事実の誤認ですね。もしくは意図的な事実の隠蔽です」
　今度は反対側の端に陣取っている相原と井田がこれ見よがしに大あくびをした。
　「……で、どうだったの？　昨日の店の女。素直に言うこと聞いたの？」
　彼らもまた真弓に聴こえるように会話をする。
　「……そりゃもう、バッチリ不倫の現場、押さえてあ

るわけだから……それでも四の五の言うからね、ちっとどやしつけたら、あとはもう……けっこう……貯めこんでるみたい……吐き出させたあとは……今度はこっちの……を呑ませてやろうかと……」
「……ヒヒヒ、意外にインテリの女……に弱いからな……組織にかかっちゃ……次は誰……」
（ハッタリかましやがって）と、真弓は冷徹さを装いながらも苦虫を噛みつぶす。威嚇どころか脅迫だ。真弓が女性であるのを最大限悪用するやり口である。
「報告がきていないだけなんじゃないですか。部下の怠慢か何かで！」真弓は言った。
専務の紀夫はニッと笑って、「うちの部下は優秀なものばかりですよ」とシャアシャアと言ってのけた。
「ほほう。そうなんですか。会長さん。あなたも同意見ですの」
「うむ。吟味して採用しておるぞ。なにしろ会員との信用で成り立つ会社じゃからのう。吟味するのは社員ばかりでなく会員の誘引にあたってもじゃ。先生が言うような、そんな根性なしはそもそも引き込んだりはせん。ノルマも果たせず、努力もしないですぐにあきらめるような男は、男の風上にもおけんわい」
「じゃあ、この委任状はどう説明するのです。法的に根拠のある書類ですよ。彼は私にはっきりと代理人として働くよう依頼したんです。ギガス・エンタープライズ

に不当に奪われた財産を回収してほしいと！」
　真弓がそう切りこんだとき、菅沼が突如、机をバシーンと叩いて飛び上がるように立ちあがった。
　「貴様っ、なにさらしてんのや！」
　空気を震わすような怒声が轟いた。顔面が紅潮し、こめかみに血管が浮いている。とうとう正体をあらわしたわけだ。菅沼は椅子に片足をかけ、虚勢を張りまくって真弓にガンタレている。
　「この腐れ×××が！　誰に向かって口、きいとんじゃい！　なにが委任状じゃ。なーにーが代理人じゃ。こちとらなあ、毎日身体はって生きとんのじゃ、そんな紙切れでビビると思ったら大間違いじゃ！　舐めたらあかんどっ。知らんものは知らんと社長も会長もいっとるからに。信用してりゃいいんじゃあ！」
　唾液の泡沫がここまで飛んでくる。
　つづいて西、相原、井田が順に立ち上がり、口汚く罵り始める。
　「生意気な豚づらでヌケヌケと出てきやがって、この阿女が！　美人弁護士？　はっ！聞いて呆れるわ。へそが茶をわかすわ。お前なんぞ、美人でもなんでもない、一目みたら目がつぶれるブスや、醜女や、え、わかるか、ド、ブ、スちゅうてんのや、はっ、はっ！」
　「スベタ！　顔ばかりでなく根性まで曲っとる。そんなゴミ女はなあ、ケツの穴に花火ぶちこんで、一発、派

手に爆発させてやろか。それくらいしか、使い道がないちゅうてんの。あんまりにも小汚い身体しとるからな。それこそ社会に対する貢献や、人助けや、たーまやー」
　「おおおー、クサー。臭うど、臭うど、この白豚。×××洗っとるのかいな。毛まみれの×××の肉にトロトロした滓がたまっとるんじゃろ。それともケツの穴を拭いとらんか。毎日毎日、真っ黒なウンコ、ヒリだしてんだろ、腹黒い女やさかい。出てくるもんも最低や。身体も垢まみれ、だから香水なんぞ、きつーくふりかけなあかん。一度、真っ裸にしてわしらのションベンで清めてやろか。ま、便所コオロギくらいは光ってくるんと違う？そのザラザラのさめ肌も、なあ」
　定番の蔑称が次々と飛びかった。
　真弓の表情をみてみよう。
　恐怖しているようには思えない。ほんの少し、額の生え際に汗が滲んでいるが、冷汗ではなく、ようやく効きはじめた暖房のせいだろう。頬にも上気したような赤みはなく、かといって青ざめているわけでもない。鳶色の瞳の動きはがなりたてている男へ順番にまっすぐ向けられている。背筋をリラックスさせ、いつまでも付き合ってあげる、と、落ち着いた態度に終始する。もっとも、さきほどから耳孔に小指を差し込みたい衝動を押さえているようだった。鼓膜がキンキンするのには閉口しているに違いない。

「悪徳弁護士が！　憲法で保障された営業の自由を侵す気か！　アーン！」
「人の弱みを食物にしやがって！　おまえら弁護士はなあ、ダニだ！　ゴキブリだ！　社会の敵じゃ！　わかってんのか！」
だんだん声が遠くに聴こえるようになってきたのは鼓膜に大音量の圧力がかかりすぎたためだ。そろそろ打ち止めにしてもらいたい。しかしさすがに四人ともなると、一人の肺活量が切れても他がカバーしあうのでこの大合唱はとうぶん終わりそうになかった。暴力をふるう気はないだろうから、もちろん席を蹴ってでていく事はできる。彼らはそれが狙いなのだ。その狙いには乗るわけにはいかない。待つしかないわけだ。
真弓はジャケットのうちポケットから洒落たシガレットケースを取り出した。優雅に細長い洋モクをつまみ、指に挟んだ。ほっそりとした白い指が女らしい。マニュキアはルージュにあわせて薄いピンク系。火をつけ、そのルージュののった唇にくわえる。肉感的な下唇。柑橘類の果実のように表面に露をふくんで、そして縦皺が刻まれている。唇が半開きになって象牙色の小粒の歯を見せながらタバコのフィルターを赤い舌でなめた。
「こ、こ、こ、こ、こいつ！　なめとんのかい！」
菅沼が色をなし、テーブルを跨ぎこえて前に出てきた。

「変態女が！　ヤキ、つっこむぞ！」
　真弓の手からタバコを奪いとろうとする剣幕である。
　「やめろ――」
　ようやく制止の声が入った。会長の高順だ。鼻を突き合わせるまでに前かがみになった菅沼がピタリと動かなくなった。瞬間冷凍である。
　「席に戻って自分の職務に復帰するんじゃ。セキュリティ担当」
　菅沼はチッと舌打ちすると、臭い息をふきかけて退却した。残りの三人も不貞腐れながら腰をおろした。
　「なかなか調教が行き届いているようですね」
　久々の真弓のハスキー声だ。手を床にのばし、ヒールの底でタバコをもみ消した。高順があごをしゃくると、菅沼がだるそうに安っぽいアルミの灰皿を持ち、再び立ち上がって真弓の机に置いた。
　「職務に忠実なのはいいことだわ。セキュリティ担当――」
　からかう真弓。菅沼の頬がひきつっている。
　「あんた、見上げた根性しとるねえ」
　高順は身を乗り出して言った。
　「弁護士なんかにしとくのはもったいないタマじゃわい。わしが世話してやってもいいぞ。店の一軒や二軒、すぐにもたせてやる」
　この場合、店とは法律事務所ではなく、クラブとかス

ナックのたぐいなのであろう。
「タバコは吸えるけどお酒はダメですの。残念ですけどご辞退申し上げますわ」
「ヒヒヒ、冗談じゃよ。しかしどうかね、我々と一緒に仕事をしてみんか。いつまでもチンケな法律事務所でイソ弁としてコキ使われていてもしょうがないじゃろ。あんたもいつかは独立しようとおもっとるんじゃろうが、その時は援助しようじゃないか。うちの顧問弁護士として雇うし、仕事も回してやる。一年で蔵がたつぞ」
真弓は斉藤良夫の書類を高順に見せて微笑んだ。
「お話はこっちを解決してからにいたしましょう」
高順はニタニタしながら引き下がり、社長と専務が相手になった。
「まあまあ、落ち着いて。中澤弁護士」
恭順は片手で鞠をつくような手つきをしてみせる。
「そうだ、お茶――、おい、おまえら、お客様にお茶もお出ししないで。まったくどうしようもないな」
井田が大きな図体で部屋の隅にいき、まるっこい指で不器用にポットから湯を注いでいる。パックを茶わんから上げ下げしている姿が滑稽である。
（こいつら、次はどんな手をひねりだしてくる気かしら）
真弓はニタニタ意味不明の笑みを浮かべている大道一族の三人を慎重に見回した。こいつらには少なくとも脳

味噌がある。菅沼たちのような豆腐のクズのような脳味噌ではない。腐ってはいるけれども。
「ところで先生はご結婚なさっているんですか？」専務が訊いた。
「しておりませんわ」
「おや、離婚されたんですかな」
「いいえ。どうして？」
「そんなにお美しいのに男性が放っておかんでしょう。そのお歳まで。三十五くらいですか？」
「まだ三十前ですよ。来年ですけどね。大台に乗るのは」
「ほう、そうでしたか。それは失礼しました。ずいぶん目尻に小皺ができているので、てっきり……」
「失礼だよ。専務。女性の年齢を云々するなんて。落ち着いておられるんだ。先生は。それに職業柄、他人のアラばかり探しているから、人相も悪くなるのさ。もし弁護士を廃業したら、今の何倍も輝きだすだろう。ミスなんとかに当選するかもしれん。もっとも三十じゃ、書類選考で落とされるのかな」
恭順社長は扇子を激しくあおいでバカ笑いした。
「で、離婚なさったのはいつです？」と、再び専務。
「結婚してないのに離婚などできるわけないでしょう。しつこいですね。さっきも言いませんでした？」
「でも処女ではないんでしょう？」

「……」
　真弓は失望した。こいつらの脳味噌もやはり豆腐のクズだ。知的なゲームなど望むべくもないのだ。
　「いや、私が言いたいのはですね。男性に愛された経験のある女性と、ない女性とではものの見方や人間に対する考え方が著しく違うということなんです」
　大道紀夫はだみ声で自説を展開していく。
　「男に愛されていない女性というのは、どこか狭量で、すべてに対してつっこみが浅く、イライラしやすいんです。これは女性ホルモンの分泌の影響かもしれませんがね。さきほどからの中澤先生の話しぶりや論理の展開を観察していますと、どうもそういう傾向があると思われるんです。自分だけが正しいと信じ、疑わず、相手の意見に耳を貸さない。相手を侮蔑し、やりこめることに執着して、それを楽しんでさえいらっしゃる。失礼を承知でズバリと言わせていただけば、人間的な優しさが欠如している。これはきっと私生活に大きな問題があるんじゃないか。男の愛を知らない女性の典型的な症状がみられる。……処女なんでしょう。経験がないんですよ」
　「うちの、これは――」高順は紀夫の肩を叩いた。「大学を出ていましてな。心理学だかなんだか、わしなんぞにはまったく手のでない教養を身につけておるんじゃ」

「それはそれはおみそれいたしました」
真弓は多少、うんざりとした表情を見せた。
「フフフ、専務。先生は特別な状況を抱えているということを考慮に入れねばならないよ。弁護士というのは多忙なお仕事だ。男性とじっくり愛をかわしあう暇なんぞ、あまりないんだよ。巡り合うチャンスさえないんだろう。学生時代に相手を見つけていない場合、女性弁護士はなかなか結婚の機会に恵まれないんだそうだ。哀れといえば哀れじゃないか。そう苛めちゃいけないよ」
勝ち誇ったように恭順は言い、真弓を嘲笑した。
「そういうやり方で挑発しようとしても、私は動じませんよ。なぜなら私は自分で自分のことがわかっており、あなたがたのどんな中傷も的外れであることを自分に対し証明できるからです。つまりあなたがたのいかなる嫌がらせも徒労であって、同時に、あなたがたがそうして私を話の本質から遠ざけようとすればするほど、あなたがたギガス・エンタープライズ社自らの欺瞞や違法性を私に確信させる根拠としかなりえないということを理解すべきだと思います。そう指摘しておいて、ではさっそく本題にとりかかろうじゃありませんか！」
この手の論駁ならば弁護士が負けるわけがない。真弓の理路整然とした主張は、その内容の如何にかかわらず、とどこおりのない弁舌の鋭さで説得力を持っていた。

今度は大道兄弟、ならびに娘婿がやや失望の色をあらわにしている。不機嫌そうに紀夫はドスの効いた大声を張り上げた。
「オラッ、井田！　てめえ、茶の一杯入れるのに何時間かかってるんだ！　さっさともってこんか、このクソガキが！」
「へ、へい……」心理学士様に怒鳴りつけられた井田は慌ててプラスチックの茶わんを運んできて真弓の机に置いた。
ペースの主導権争いに勝利した真弓は最後まで理性を失わずに対応できた自分に満足して、熱さが全体に伝わっている茶わんを手に取り、そっと口をつけた。まったくの出がらしではあるものの、勝利の美酒はまずいわけはない。
さらに茶わんを傾けて、グイと呑みほそうとした瞬間、身体がフワッと浮いたような気がした。眩暈？　地震？　違う。寄りかかろうとした椅子の背が体重を支え切れずに壊れたのだっだ。
真弓は、あっ、と悲鳴を発した。足を踏張ろうとしたが間に合わず、茶わんを握ったまま手でバランスを回復しようとしたが無駄だった。女弁護士は顔面にお茶を浴びながら背中から床へ落ちた。
背筋と後頭部をしこたまぶつけて呻き声をあげる真弓。ドヤドヤと七人の男たちが駆け寄ってくる。

「椅子のパイプが折れたんだ」「救急車を呼べ」「器物破損だ」
口々に勝手な事を言いながら彼女を取り囲み、手を貸さないままにじっと覗き込んだ。真弓は仰向けに昏倒し、顔から胸もとにかけてをお茶で濡らしていた。下肢が開き加減になっており、さらに膝を浮かせている。スカートの裾がめくれあがり、太腿の中程までが露出していた。ストッキングの細かな編目からみえる桃色の肌が目を奪う。
「何をやっとる！　早くお助けせんか！」
高順の一喝が飛ぶ。
「そうだっ、お助けしろ！」
「よっしゃ、お助けだ！　お助けだ！」
まるでけんか祭りの威勢のよい掛け声のように高順をのぞいた六人が気勢をあげつつ、どっと真弓に襲いかかった。
「お助け！　お助け！」
「わっしょい！　わっしょい！」
一本の腕が真弓の胸ぐらをつかみ、左右からそれぞれの二の腕がわしづかまれる。節くれだった指が柔肉に食い込んだ。
「……い、痛い……乱暴は……」
真弓の声も男たちの掛け声の前にかすんでしまう。強引に立ち上がらされた。

　大男たちの輪の中――身動きがとれないほどその輪は狭い――ではさしもの真弓も埋もれてしまう。男たちの興奮しきった金切り声と異様な圧力に真弓は殴打した身体の苦痛など痺れてしまったようだった。
　「お助け！　お助け！」
　「わっしょい！　わっしょい！」
　「まだ意識を取り戻していないようだぞ！　正気づかせるんだ！」
　誰かが叫ぶと真弓はいきなり頬を張り飛ばされた。驚いていると反対の頬も横殴りに払われた。顔の輪郭が丸くなった感じだ。
　「まだボォーッとしている！　揺さ振ってやれ！」
　「そうだっ、揺さ振るんだあ！」
　「わっしょい！　わっしょい！」
　首根っ子をつかまれ、グラグラとやられた。
　「あっ……あっ……」
　誰かのあごに額がぶつかった。目から火花が飛ぶ。ゴツゴツした髭の感触にぞっとする。かと思えば、頬に背広のボタンがめりこみ、次は顔面ごと男の胸板に押しつけられる。鼻がぺしゃんこにつぶれる。
　「フンギャ……ムググ……」
　「お、呼吸困難に陥っとるぞ！　心臓マッサージをしてやれえーい！」
　「おおーっ！」

　ときの声があがり、先を争うように何本もの手が真弓の胸をつかみとろうとする。しっかりとふくらみを押さえつけると、遠慮会釈なく揉みつぶしはじめる。片側だけでなく双つとも。ブラウスが皺くちゃになり、ボタンのひとつが弾けとんだ。ビンタが二発三発と炸裂した。ポニーテールに束ねていた頭髪がバラバラにほぐれ、そのなかへ脂ぎった手がつっこまれ、グシャグシャに乱された。
　耐えかねて真弓は必死に叫んだ。
　「やめてぇぇーっ……いい加減に……してぇぇ」
　「おお、息をふき返したぞ！　瞳孔を調べろ！」
　「瞳孔だ！　瞳孔だ！　お助け！　お助け！」
　頭を万力のように挟まれた。そのまま後に仰け反らされる。黒い爪をした指が上下の瞼を押し込み、そしてくつろげた。充血した眼球が剥き出しになる。水分に濡れた美しい水晶の球は空気にじかに触れてチリチリと痛んだ。おそらく恭順社長の顔が覗き込んでくる。絶叫調でわっしょい！わっしょい！とやっているので、唾が目に入ってきた。目を見開かされたまま、今度は鼻をつままれ、耳をひっぱられ、頬を抓られた。
　悲鳴とともにくしゃみが何度もでた。
　「よーし、もう大丈夫だっ。手当てが良かったから、軽傷ですんだ。あとは汚れた顔をお拭きしてやれ！」
　「お拭きしろ！　小汚い顔をお拭きしろ！」

　胸は離されたが顔はつかまれたまま。その顔にいきなり雑巾が覆いかぶされた。
　「うぐぐ……」
　ドブのような臭いに吐き気がする。
　「それっ、わっしょい！　わっしょい！」
　雑巾が力任せに顔面をこすりあげた。朱唇がめくれかえった。ザラザラの生地が肌をジリジリと傷つける。
　「わっしょい！　わっしょい！」
　雑巾は一枚ではなく、さらに一枚が首筋にあてがわれ、喉を締めつけ、そして胸もとに這いおりた。真弓は藻掻いたが両腕はがっちりと取られていて身動きひとつできない。胸乳にまでは侵入しなかったものの、輝くような白い胸もとが赫らむまでゴシゴシやられた。赫らんだといえば顔のほうがひどい。雑巾が取りのぞかれると、それは痛々しいくらいに真っ赤だった。化粧がすべて拭いきられた素っぴんの真弓の顔が出現したわけだが、いくらかキツキツした知性美がしりぞき、丸くなった感がある。小さな黒子が目立つとかえって生々しい色香が漂う。その美貌にソバージュのおどろに乱れた黒髪がばらばらとかかっていた。
　「よーし、先生はお帰りだ！　体調がすぐれないので今日はもうお帰りだ！」
　「お帰りだ！　お帰りだ！」
　腕を持ち上げられてヒールが床から離れたまま、お神

輿のように担がれて通路まで運ばれ、そのまま入り口まで突進する。途中、あの大女とオバチャンがゲラゲラ笑いながら見送った。
　真弓はエレベーターホールまで運ばれ、待っていたエレベーターに放りこまれた。
　どいてどいてと女二人組が男たちの垣根を割ってきて、ロッカーに入れていた真弓のアタッシュケースと傘を持ち出してきて、「忘れもんだよ」と尻餅をついて呆然としている彼女に押しつける。
　エレベーターの扉が閉まる前にバイバイと手を振りながら彼女たちは言った。
　「お大事にね！　先生！」
　二人は並んでせーのと呼吸をあわせ、同時にアカンベエをした。

セックスフレンド

　真弓は熱いシャワーを浴びてほてった身体をベッドにおいていた。頭にタオル。胸と腰を一枚のバスタオルで巻いている。肌はピンク色に上気し、ピカピカに光っている。
　肩はかっちりした幅を持ち、鎖骨が美しく浮き上がっていた。バスタオルを巻いている胸もとの、双乳へと盛

りあがっていく部分にはくっきりと谷間ができている。上体を前傾し、足をゆったりと腹部へひきつけ、両手で火照りを押さえるように撫でまわした。
　太腿から膝……脛……ふくらはぎ……
　理想的な長さとかたちを持っている。肉感的な太腿はそれにもましてボリュームたっぷりのヒップの丸みにつづいている。
　それまで小さかったバスルームの水音が急に明瞭なものとなった。
　「先生、シャンパンと、それと缶詰、用意しておいてくださいよ」
　「うん、わかった」
　甘ったるい、まだ青春時代の未熟さが消えていない若者の声に、真弓はちょっと笑いながらこたえた。
　ベッドからおり、小型の冷蔵庫をあける。よく冷えたシャンパンと水蜜の缶詰を取り出した。小脇に抱え、ふたつのカットグラスと缶きりを手にしてベッドに戻る。彼女はベッドのうえに胡坐をかき、サイドテーブルへ置いた缶詰の蓋を切りはじめた。
　もう一度、バスルームの扉が開いた。水音はとまっていた。
　「いやあ、いい風呂だった。一日の疲れがふっとぶようですな」
　真弓は声をあげて笑った。

「祐樹くん、ジジくさいよ、少し」
「へへへ、完璧でんがな」
わけのわからない返事をして若者が部屋に入ってきた。頭をかきむしるようにタオルで拭いている――それが彼の癖で真弓はいつも犬みたいと吹き出すのだ――が、全裸で、股の間にぶらさがった巨きめのペニスもそのままだ。それも、熱い湯の放射に薄桃色に染まっていた。とくにその亀頭……。真弓は思わず缶きりを切り口の円周から脱線させてしまう。
男――原口祐樹はＫ大四年生、二年留年中なので今年二十四歳だ。今のところ、真弓にとって唯一の男性である。男性……そう、そんな感じ。恋人や愛人と呼ぶにはちょっと違う、セックスフレンドというおもむきが濃い付き合いといって良かろう。月に二三回、ラブホテルへ連れ立ってベッドをともにする。
祐樹はタオルを首にかけ、真弓の隣に腰をおろした。刈り上げた短い髪がボサボサに跳ね上がっている。筋肉質の逆三角形型の体型はテニスと水泳と、それにボクシングジムでのトレーニングで鍛えたたまものだ。このオリーブ色をした若々しい肉体が真弓のハードワークのストレスを解消してくれる魔法のマシンなのだ。
原口祐樹とは依頼者と弁護士というかたちで出会ったのだった。彼はスポーツカーでドライブ中に事故を起こし、多額の賠償金を請求されていた。彼の父親は成功し

た中小企業の経営者。ワンマンな成り上がりもの。その手の人間によく見られる、子供溺愛型の男で、息子の傷を少しでも小さくすることに奔走した。だが事情を聴取してみると、全面的に祐樹に責任がある事故だった。スピードのだしすぎに信号無視。これに酒気帯びが加わっていたら行政処分だけではすまなかっただろう。この程度の賠償金もやむをえないと思われたし、わがまま放題育てられたバカ息子には少し御灸を据えたほうが良かったはずである。だいいち祐樹には反省の色がまるでなかったのだ。相手の運転技術の未熟を指摘さえする始末だから、なにをかいわんやであろう。しかし父親がガンとして引き下がらない。子供を猫かわいがりする一方で、ドケチでもあった。

結局、真弓が相手の交渉人と何度も協議折衝してこの種の事件では最小限の弁済で示談にこぎつけた。父親には、なんだ、やっぱり払うのか、とちっとも感謝されなかったが息子のほうにはひどく感激された。

この軽薄な息子が自分の美貌と弁護士という職業にミーハーな興味を示しているのには気づいていたし、誘われもした。弁護士と依頼者の関係で肉体関係を結ぶのはタブーである。真弓は当然のように断りつづけたが、すべてが終了した日から一週間後、二人はラブホテルに入っていた。

祐樹の人間的未熟さが母性本能をくすぐったとの見方

を真弓は一笑にふすだろう。ようするに、適当な男がいなかったのだろうか。あのギガス・エンタープライズ社の忌々しい大道恭順社長がいみじくも指摘したように、女性弁護士は弁護士になる以前に伴侶候補者を獲得しておかないと婚期を逸する危険性がある。そればかりか、ボーイフレンドすら見つからない場合が多い。事実、法律事務所に就職して以来、真弓の前にあらわれる男性といえば、人生に疲れ、失敗した依頼者か、恭順のような唾棄するに妥当な犯罪者か、どちらかなのであった。運悪く同僚の弁護士たちはすでに片づいていたし、彼らと付き合うのは結婚につながることを意味している。今はそれは避けたい。

　原口祐樹はそうした彼女にはぴったりの遊び相手といって良かったのだ。彼はどうみても遊び慣れている。女の扱いを心得ている。これは重要で、クタクタに疲れた頭と身体で、さらに男をリードするのはしんどすぎる。しかし知能程度はあってないようなものだから、主導権はこちらにあり、別れるのも切れるのも自在にできるだろう。良心の痛みもないし、こういうバカ息子には世の中が何でも思い通りにはいかないのだということをわからせるのも、大事な社会人の使命である。法律がさしてできなかった御灸を自分がすえるのだ。もっとも、この男が女に捨てられたからといって傷つくとも思えなかったのだが。

しかし原口祐樹がベッドのうえではなかなか得難い特質と才能の持ち主であるのは事実だった。なによりいいのはこの清潔で敏捷な肉体であり、一目みてセックスの強さを感じさせた。それは最初の晩に証明され、真弓は久々に燃え上がり、二度目からは女の射精を見せるほど、祐樹の肉体にフィットしたのだ。

以来、関係は半定期的に一年ほどつづいている。

今夜もいつものようにこの頭脳の欠如したセックス人形と抱き合うのだ。あの時の強烈な肉悦を思い出して、真弓のヴァギナは少し濡れていた。つまり自分もまた頭脳の欠如した浅ましい女に成り下がるのである。それこそが俗世を忘れる最も有効なリフレッシュの仕方なのであった。

「へ？」と祐樹。「何を見てるのよ。先生――」

「ン？」

「今、ジトーッと見つめていたよ。ぼくの顔」

「嘘よ……」

祐樹はいやらしくニヤけた。「いや、ホント。ものほしそうな目だったね。サカリのついた三十女の目だった」

「バーカ、いやらしい」

真弓は照れて顔を赫らめながら水蜜の缶詰の蓋をあけた。指に付着した濃厚な蜜をなめる。甘い味が口腔に広がった。

「一万円、賭けようか？」
「なに、それ？」
ぐっと身を乗り出してき、真弓の眩しいまでに光沢をみせる肩にキスをする祐樹。
「先生のアソコ、濡れているほうに一万円、賭けるよ」
真弓は声をあげて笑ったが、祐樹の指がバスタオルの裾から侵入し、鼠蹊部にふれてくると少し狼狽して身体をベッドの先へ逃がした。しかしその動きはけだるくスローモーである。祐樹の指は下腹部にのっている織毛をあやした。そして亀裂へおりていき、媚肉をまさぐった。
真弓は縁の赫らんだ目で祐樹を凝視する。
「もらった。今週の小遣い」
祐樹は指を引きぬいてさっき真弓がそうしたように口に咥えてしゃぶった。
「へへへ、完璧でんがな」
真弓は祐樹の声色を真似ておどけた。シャンパンをカットグラスにそそいだ。シャンパンも洒落たカットグラスも、水蜜の缶詰も、すべて祐樹が購入して運びこんだ物。セックスの小道具に使うのだ。今夜は『村上龍の一連の小説風』に決めるのだと張り切っている。祐樹が小説を読むとは思えなかったので誰かの受け売りだろう。だがそれはどうでもいい。ミーハーな演出でもかまわな

い。何もかも忘れさせてくれればいいのだ。
　祐樹は真弓の頭に巻いたタオルを取り去った。するすると長い黒髪がおりてくる。それは白い肩に流れて鮮明な対照をなした。
　二人は透明な炭酸の泡を弾けさせている液体を、グラスをチンと鳴らして飲んだ。ほのかな香りが恍惚の序曲を奏でているよう。冷たさが火照った肉体に心地よい。
　祐樹はもう一口、口に含み、真弓に唇を近づけた。真弓は瞑伏し、濡れた朱唇をさしだした。口移しにシャンパンが流し込まれると従順にコクリコクリと嚥下する。祐樹の舌が唇をなめ、さしこまれてくる。痺れた舌を刺戟しあい、鼻息がかすかに乱れてくる。胸もとに手がかかり、バスタオルをほどいた。美人弁護士の胸乳がまろびでた。丸い乳ぶさが品よく並んでいる。大きからず小さからずの乳輪は美しいピンク色。乳首はツンツンと尖っていて上向きだった。
　濃厚なキスに喘いでる腹には贅肉のたるみはなく、小さなへそが愛らしい。太腿の付け根に咲いた漆黒の草叢はどちらかといえばよく繁茂しているといえそうだったが、艶があり、縮れは少ないほうだろう。
　祐樹は乳ぶさを握り、柔らかく揉んでからキスをといた。二人は肩を寄せあい、ベッドから足を投げ出して並んで座る。真弓は銀のフォークで水蜜の一切れを突き刺して、祐樹に食べさせる。

この章の残りは有料本編でお読みください。
######

肉体の統御と精神の管理

「いやっ――」
真弓は悲鳴を発して顔を背けた。目をつぶり、何もかもを心から追いだそうとした。だが瞼の裏側には消しがたい映像が焼きつけられている。猛烈な電流に毛先まで震わせながら荒々しいほどに逆立っている平静時とはまったく相の違う陰毛。そしてさきほどまでの清潔で頼もしい印象を与えていた祐樹のペニスは不気味に色を青黒くしており、貪欲な爬虫類の頭部のような狂暴さをみせつけている。その頭部はヴァギナを開帳させグサリと没入していて、ぬったりと抽送されている。浮沈する茎胴には言い逃れのできない真弓の蜜液がたっぷりと付着しているのだった。
媚肉の縁は摩擦に紅潮している。ひきずりだされる襞肉は黒さすら感じるほどに色を濃くしていた。これほどのおぞましく、醜怪な行為がどうして息もできないほどの甘美な愉悦をもたらし、恍惚にいたる陶酔を生じさせ

るのだろうか。
　口惜しいのは祐樹のこの仕打ちである。変態性欲とはいかないまでも悪質すぎる悪戯であろう。だが、彼が真弓の上体を縦横に操り、ピストン運動を強めたので、口にでかかった恨み言は途中で雲散した。
　「たまらない……イキそうよっ……」
　すっかり発情していた肉は映像の嫌悪感に勝って、再び彼女を泥沼へひきずりこむ。祐樹はいよいよ女弁護士にトドメを射しにかかった。彼の手は真弓の手首をつかみ、水平に近く彼女を倒すと、そのまま腰をグンと迫り出し、臓腑を押し上げんばかりに結合を深めた。そして激しく衝いた。
　真弓はすでに明瞭な声を失い、切れぎれの苦鳴を発するばかり。彼女の瞳が完全に白目になり変わる寸前、彼女の視線は鏡のなかの自分をとらえたが、もはや何の感情も沸騰しはしない。
　吠えるような咆哮が真弓の口からほとばしった。全身が自分のものとは違う力にビーンと硬直し、一本の棒と化した。祐樹が手を放しても彼女はシーツに突っ伏すことはなかったのではないかと思われるほどの緊張感で漲ったのだ。呼吸がとまり、自失寸前の真空状況が訪れた。
　数秒後、緊張は途絶し、蒼白の女体からあらゆる力が蒸発した。カクンと背が丸くなった。額がシーツに落ち

た。
　「うう―っ……」
　呼吸が再開されるとともにエクスタシーに痺れた喘ぎが吐き出された。シーツに彼女のよだれがしたたった。肋骨を透かせた脇腹が大きなリズムで波打っている。ときおりそれを乱すように小刻みな息遣いがまざったが、つまり返す波のように余韻が戻ってきたのであろう。
　祐樹はペニスを引き抜き、精液のたまったコンドームを始末して、彼女の横に添い寝した。
　うつぶせの彼女は横を向いていたが、黒髪のなかに表情を埋めていた。それを晒すのはもう少し後にし、祐樹は美人弁護士の正気を失った裸体をじっくりと観察した。汗でヌルヌルの肌は小さな黒子はおろか、毛穴までつぶさに可視できるほど無防備だった。盛大にふくらんでいるヒップの双つの山が、まだホカホカとして湯気が立ち昇っているようである。その谷の翳りまで脂汗で滲んでいるのが何とも扇情的。右足はほぼ真っすぐに伸びきって、ピンク色の足の裏まで見せていたが、左足はくの字に曲っている。そのため、ここからでも跨ぐらの媚肉と織毛のシルエットが見えた。意識があれば絶対に維持しないあられもないポーズだけに祐樹は微笑を浮かべる。手のひらも天井を向いているのだった。手は左右対称のかたちをしている。なんと表現をすればいいか……そう、運動会のリレーの選手が今まさにバトンを引き継

ごうと構えている、その時の受け取る側の手の格好だった。両方の腕がそのかたちなのである。滑稽であり、愛らしかった。
（よっぽど、トチ狂ったってわけだ。いつもならもっと行儀よく失神するもんなあ）
祐樹はニタニタしながらようやく髪に手をかける。顔の輪郭を探りながら指に一杯の黒髪を絡めて掻きあげた。シーツに横顔を押しつけているため、頬が圧迫され、美貌がひしゃげている。しかし肉欲に破れ去った女の顔としてはちょうどいいかもしれない。閉ざされた長い睫毛がフルフルとそよいでいる。血の気を取り戻しつつある唇は突き出すように半開きになっていた。あごに肉の皺ができ、彼女の年齢を五歳は若く見せていた。頬の毛穴まで開いているのが微笑ましい。
今夜は特別だけれども、概してこの女は全力でセックスに没頭するタイプである。失神や射精現象もそう抵抗なく見せるし、羞恥心も表さない。ストレス過剰の現代人がスポーツやレジャーに奔走するように、この女はセックスでリフレッシュしようとしているから、尋常な臆面などそもそも捨てているのだろう。
原口祐樹は彼女の魂胆をすべて見通していた。彼は彼女が思うようなマザコンのバカ息子ではないし、知能程度の低い遊び人の学生でもなかった。ある意図に基づいて、そう演技しているだけであって、実際は教養もあり

学力も高い。彼は自分をゲームを楽しむプレーヤーと自認していた。対戦相手は女であり、目的は肉体の統御と精神の管理である。つまり狙った女のすべてを収奪することである。彼は自分を変質者とは考えていない。暴力的に女を姦し、非合法に監禁するような野蛮な、非理性的な行動を軽蔑している。彼が欲しているのは知的なゲームであり、一点の曇りもない勝利である。犯罪者に勝利はなく、びくびくと暮らす弱者の生活が残されるだけではないか。

　彼はこのゲームをはじめた当初の二三件をのぞいて、ターゲットをインテリ層の女性に求めていた。彼女たちがいいカモになるわけではない。例外はあるもののほとんどがその逆だ。欧米諸国に比べ男女同権意識がまだまだ低いわが国において、彼女たちが直面している状況は苛酷であり、それゆえに彼女たちの防衛本能は強固なものとなっている。防衛本能ばかりでなく、攻撃的ですらある。明晰な頭脳は簡単に男の淫らな下心を看破するだろうし、しっかりとした経済力は男の庇護を必要としない。彼女たちにはうわべの美形と逞しい肉体だけでは嘲笑されてしまう。

　精密なリサーチに基づいた周到なプランニングがなければ、勝利どころか、対戦相手の席にすら近づけまい。しかし困難さがともなえばともなうほど、ゲームはエキサイティングなものとなり、彼の達成意欲は昂まる。勝

利したときの快感は何にもかえがたい人生の糧なのだ。
　彼が目的にしている肉体の統御とは、女をいかなる状況下でも、いかなる精神状態においても、その肉体から思念や人間的な感情を追い出し、知性や理性の一粒も捨てさせて、燃え上がらせることが自由自在にできる状態である。言わば調教であるが、祐樹は通俗ＳＭのような言葉を軽蔑していた。
　精神の管理は、女が祐樹に百パーセント依存するようになり、たとえば命令すれば重要な仕事を放り投げてでも彼の元に馳せさんじ、あるいはいかなる金銭的な要求もこれを拒まず、さらにいえば彼女が既婚者であれば伴侶を捨て、未婚者であれば恋人を捨てるような状態に行き着いた時、初めて完成されたといえる。
　精神の管理がなされてしまえば肉体の統御も容易であろうとか、またその逆も自然に導きだされるべきもの、などと言い切れるほど、人間は単純なものではないし、個人差も無視できない。
　彼は自分に厳しく条件を課しており、これらの状態に持ち込めなければ、潔く敗北を認めるのにやぶさかであってはいけないと自戒していたが、幸いなことに今現在まで、彼のこの内規に抵触した事例はひとつもなかった。女たちは彼の巧妙な罠にはまり、悪辣な企みにキリキリ舞いし、破れ去っていった。彼の知性と肉体は連戦連勝の勝率をもたらし、いやがうえにも自信を増大させ

ていった。
　中澤真弓弁護士がそんな彼にとってただならぬ興味をそそられる女性であったのは言うまでもない。今までのどの女よりも難敵であり、攻略は困難に思えたから、いよいよ彼のファイトは燃え上がった。ライフワークとまではいかなくとも、ひとつの区切りとしてのメモリアルポイントにしなければなるまい。なぜなら彼の学生生活は残りわずかとなり、これを一種の卒業論文のように考えたのである。

　この章の残りは有料本編でお読みください。

　　才女、画策す

　今日は事務所に入る前に裁判所へいって某訴訟の相手側代理人と交渉をする予定である。
　真弓は身仕度を整えた。かっちりスーツにタイトミニ。ポニーテールに縛り、前髪を額に垂らし、真ん中から分ける。相手の代理人は海千山千のベテラン弁護士だから色香に迷うわけはないが、軽いジャブ程度にはなってくれるはずだ。

化粧を濃い目にしなくてはならないのが不満といえば不満。厚化粧は女を愚鈍に見せるものだ。けれど遊びすぎて痩れた顔をそのまま晒すのは尚まずい。真弓は鏡を覗き込んだ。

（ひどい顔……）徹夜の仕事がつづいたうえに、原口祐樹との未明までの性交のダメージがまだ残っている。肌はぼろぼろ。目元のたるみなど恐ろしいものを見るようだ。

あれはやりすぎだった……深い悔恨が彼女の胸に去来している。ストレス解消どころか、かえって疲れを蓄めこんでしまった。一線のキャリアウーマンとしては大失敗のオフといえる。とくに最後の逆さフェラは。

（最近の私はどうかしているんだわ）

思い出して頬を熱くさせながら、真弓は反省する。若い祐樹が回数を重ねるごとに増長していくのはある程度仕方のない面がある。それをコントロールする自信があったからこそ、彼を相手に選んだのだ。あんな小僧に操られてどうする。セックスに溺れるなんて退屈な女のすることだ。

（そろそろ祐樹との仲を考え直してみる時期かも）

だが祐樹の魅力は捨てがたいものであるのも事実なのだ。あの肉体と清潔なペニス――真弓の口中にペニスの味が甦り、唾が沸いてきた。顔面に吐き出されたザーメンの匂いを思い出して小鼻をヒクヒクさせた――はそう

簡単に手に入るものではない。まだいい、と真弓は思いなおす。整理するまでではない。今回は軌道修正させるに止めよう。ノーマルなセックス一度きりのペースに復帰するのだ。ビシリと言いきかせるのだ。一回くらいすっぽかしてやるのもいいかもしれない。真弓にとっても寂しいことだが、それはそれで自分への罰と考えよう。肉欲に負けた弱い自分への高価な罰則である。
　ハイヒールに足を通すと、背後でコードレスホンが鳴った。真弓はチッと舌打ちし、手を伸ばして掴んだ。
　「ハイ、もしもし……」
　耳障りなノイズが聴こえる。コードの接触不良のようなノイズ。無言の行。よく耳を澄ますと、ノイズの後に呼吸音がしている。かけ手はそこにいるのだ。
　「もしもし」きつい調子でもう一度呼びかけると、ようやく相手は反応を示した。
　「……色っぽいんだね。先生の声って……」
　「えっ？　なんですか？　どちら様ですか？」
　「ハスキーって言うんだろ。そういうの。ヨガリ声に聴こえるよ。いつでもさ」
　変態電話。真弓はさっさとスイッチを切った。こんなもの、不快に思う程でもない。日常茶飯事とは言えなくとも、頻繁にかかってくる。本体に戻す前にまたコール音。きっとリダイヤルを使っているのだ。相手にしないのが肝心。しかし仕事の電話だったら？

やれやれ。もう一度だけ出てみるか。
　スイッチを入れるとまたノイズが聴こえた。ちぇっ、外れだ。
　「ダメだよ。先生。切っちゃ。大事な用があるんだから」
　さっきから気になる点がある。この男は真弓を先生と呼んでいる。この手の電話ではお前とかネエチャンとか、そんな呼称が普通だが、少なくとも彼は真弓を弁護士だと知っているようである。真弓は電話を切らなかった。
　「……ちゃんと身体を洗ったかい、先生。仕事にいくのに男の匂いをプンプンさせていっちゃいけないよ。最近は女の裁判官もいるんだろ。嫉妬させちゃ、損だもんな。五時間も六時間のラブホテルに入り浸りになって、汚れた身体で法廷に出ていっちゃ、反感買うぜ」
　とっさに判断を求められた。真弓の職業を知っての悪戯であることはこれで判明したが、原口祐樹との密会の事実まで彼は把握しているか？　ホテルで過ごした時間はだいたいそうしたものだ。だが、変態電話男の女性観は、だいたい淫らで浮気性で黒い下着を付けていたりするのが常である。そこからくる当て推量かもしれない。
　「声を聞かせてくれよ、先生」
　「もう切るわよ」
　「そんな声じゃない！」

　男は怒鳴った。「学生とオ×××しているときの、あの時の声だよ！」
　真弓は電話を切り、下駄箱のうえに置いてマンションの廊下に飛びだした。扉を閉める前にもう一度、鳴りだしたが無視し、鍵をかける。
　誰かが私を尾行している！
　真弓はエレベーターに飛び乗り、すぐにクローズボタンを押した。扉の動きがもどかしく感じられる。今にも姿なき尾行者が姿を現し、暴漢者に変わって乗りこんできそうな気がした。マンションを出、表通りをバス停まで向かう通勤者の群れにまぎれると少し落ち着いてきた。落ち着いてくると冷静に考えることができた。
　（何をビクビクしているのよ）真弓は身内で苦笑した。
　まったくその通りだ。自分が犯罪をおかしていてその証拠を第三者につかまれたような狼狽えようをしている。馬鹿馬鹿しい。何も罪などおかしていないではないか。自分も原口祐樹も既婚者ではないのだ。これは不倫でもなんでもない、ただの恋人同士の付き合いなのだ。いずれ男を捨てる気でいるのは世間では異色かもしれないが、それは自分以外の誰にもわからぬ話である。この時点では後ろ暗く思う事実はなにもないだろう。公表されたところで非難される心配はない。笑われるかもしれないが、社会的生命、信用が傷つくとは思えない。ゆえ

に、脅迫もありえない。
　（どうかしてるわ）
　バスに乗り、地下鉄に乗り換え、裁判所のある駅でおりる。
　しかし真弓の疑念が晴れたわけではない。これが個人的な変態趣味からくる尾行であるとはちょっと考えにくかった。そこまでするのはドがすぎている。ありえなくはないだろうが、裏になんらかの組織的な意図が隠されていると考えたほうが妥当ではないか。とすると、いったい誰が自分を内偵する必要があるかだが……真弓は当然のように現在抱えている幾つかの訴訟事件の相手を想起した。思い当るのはひとつだけ。
　ギガス・エンタープライズ社――
　奴らならやりそうな手だ。人のあらを探して脅しをかけ、交渉を少しでも有利に導こうとするさもしい根性である。弁護士が嫌がらせに辟易し、話を早く済ませようと考えてくれるだけでもいいと思っているのだ。真弓は初めての経験であるが、こういった弁護士に対するプレッシャーはしょっちゅう耳にしている。むろんそれでたじろぐ同業者の話は耳にしたことがない。かえって逆効果に終わるのがオチ。
　（もっと、私の性格を調べてから行動すればいいものを。マーケティングが甘いわよ）
　真弓は嘲ら笑った。横一列に行儀よく並んだギガス・

エンタープライズのインチキな面々。どいつこいつも思った以上にボンクラだ。これでよく何百人も詐欺にかけられるものだ。
　（あんたたちは女の胸を撫でまわすような痴漢行為しかできない無能力者よ。私が成敗してやるから待ってなさい）
　裁判所での交渉はこちらのペースで進んだ。艶やかな彼女の容姿が功を奏したというより、今日の真弓は昂奮気味といってもいいくらい迫力があり、相手の弁護士を圧倒していた。舌鋒に切れ味があり、押し出しも強かった。変化球なしの剛速球でグイグイ胸もとをついた。次回交渉の日程を決めた頃には相手はハンカチで顔の汗を拭っていたほどである。
　裁判所の廊下を意気揚々と歩いていると、職員が駆け寄ってきて電話が来ていると報せた。事務室の窓口で電話を受け取る。
　「ハイ、中澤ですが」
　「おっぱいモミモーミ！」
　「……」
　「お前の×××は臭い！　豚の餌より臭い！　最低だ！歴史上、最低の臭さだ！　おっぱいモミモーミ！」
　真弓はすぐに電話を切った。職員は書類に鉛筆を走らせて聴こえないふりをしていたが、バカでかい電話の音は彼の耳にも入ったに違いない。ばかげてる。愚劣。笑

止千万。
　杉内法律事務所にたどりつくと、実家の母親から宅急便が届いていた。職場に直接、発送するなど珍しいこともあるものだ。事務所へのお歳暮のつもりだろうか。添付されていた伝票には食物と記されている。田舎名物の団子か何かだろう。真弓は危うくみんなの前で開けて、お茶と一緒に食べようとした。紐をとき、梱包を開けようとした時、いやな予感がひらめいた。
　（これも悪戯かもしれない）
　慌てて包みを抱えて自分の部屋に飛び込んだ。鍵をかけ、恐るおそる箱の蓋を開けてみる。
　「――っ」
　真弓の判断は正しかった。これをみんなの前で広げたら、赤面していたところである。一応、全員、紳士だし、仕事柄、驚きはしなかっただろうが、やはり気分は悪い。
　彼女は半紙のうえに乗っている男根の模造品を呆れて眺めた。これがバイブレーターなのだ。真っ黒な硬質ゴムでできており、コードとリモコンが接続されている。つい、祐樹の一物と比較している自分が情けなかったが、こちらのほうが巨きいようだった。それにしてもよくできていて亀頭の形などは精密といってよかった。
　真弓は箱のなかにカードを見つけた。それにはこう書かれていた。

『一時の寂しさも我慢ならないであろう、あなたへ。事務所のトイレで使用してください。サイズは想像して決めましたが、小さすぎるかも知れません。ご不満でしたら私のを試してみませんか。きっと人生観が変わりますよ。追伸――使いすぎてアソコを黒くしないでください。クリットへの刺戟はほどほどに。また厚化粧で出勤しなくてはならなくなる――』

この章の残りは有料本編でお読みください。######

男たちの逆襲

真弓は別の事件で法廷にたつため、地裁へ向かう地下鉄のなかにいた。さすがにテレビの影響力は大きく、最近では買物をしていても見ず知らずの人間から声をかけられたりする。私生活ではサングラスをつけたり、髪型を変えてみたり、素っぴんのまま出掛けたりして誤魔化しているが、仕事となればそうもいかず、いかにも敏腕弁護士依然とした出で立ちに戻らざるをえない。必然的に車中の目は美貌のキャリアウーマンに集中し、そのいくつかは彼女を今、評判の美人弁護士であると発見した

ようだった。
　真弓はコートを着、書類の入ったアタッシュケースを右手に下げていた。ポニーテールのヘアスタイルに化粧もやや濃い目である。
　都心に近づくにつれて混んできた。彼女はポケットのなかに突っ込んでいた左手で吊り革につかまった。
　揺られながら、真弓は三日前の夜、原口祐樹が味わったであろう、寂寞と屈辱について考えていた。彼はなかなか来ない恋人にいらつき、何度も時計を見たに違いない。その視線はしだいに熱をもち、しまいには充血したことだろう。結局、すっぽかされた現実に気づくと激怒し、あるいは屈辱のひどい気分に陥ったはずだ。真弓への恨み言を罵りつつ、祐樹のほうからは連絡のとれない状況に地団駄踏んだかもしれない。
　（少し、薬が苦すぎたかしら……）
　胸のなかで微笑を浮かべる。あのどこか傲慢で自分本位な性格には耐えがたい御灸だったかも……。いやいや、と真弓は首を振る。このくらいしたほうがいいに決まっている。祐樹が増長しはじめているのは疑いのない事実なのだ。男に女の身体を自由にできるという確信が芽生えると、対等な関係は音をたてて崩れてしまうものだ。女を支配した滑稽な妄想はやがて行動や言動にもあらわれ、ついには最も望んでいない方向――生活への干渉などといった――へと関係がねじれていく。それは彼

との関係ではあってはならない話なのだ。軌道修正はしなければならないのであり、主導権は常にこちら側に存在しなければならない。
（祐樹くん、辛いのはあなただけじゃないのよ）
実際、それは事実であった。どうやら自分の意志に反して、真弓の肉体は祐樹とのセックスに焦がれているのだった。禁断症状といった大げさなものでないにしろ、彼の容姿を思い浮べると、胸の奥にツーンと甘酸っぱい感情が沸き起こり、カッと頬が火照ったりする。セックスの刺戟が蘇り、下腹部の底がジンジン疼いたりする。祐樹に対する愛情ではない。これは肉欲の問題なのだ。どうも、祐樹に教育されているのかもしれない、と、ふと思ってみたりする。上手なセックスに順応しており、回を重ねるごとにハードに淫らになる行為を受け入れているうちに、『次』を求めている自分がいるのではないか。その階段が外され、もとへ戻ると、たとえようのない寂しさと物足りなさを感じてしまうのではあるまいか。それは恐いことだ。知らぬうちに泥沼に足を突っ込んでいたらどうする。祐樹に下心があるとは思わなかったが、客観視すれば結果的にはそうなる。
真弓は自戒するのだ。肉の渇きをコントロールし、あくまでセックスは人生の潤滑油にとどめておくこと、それが肝心なのだ。祐樹は可哀相だが、ようするに金持ちのバカ息子だと、もう一度確認しておくべきだろう。

駅に発着するごとに客はふえ、鮨詰め状態になりはじめた。この季節、皆、冬物の衣類を着込んでいるので密集率は夏よりひどい。
四方からの圧力を受けて、真弓は吊り革を握り直さねばならなかった。
背中からの圧力の具合に奇妙なものを感じとった。後頭部のあたりに広げられた新聞紙のざわつきのことではない。満員電車のエチケット違反は日常茶飯事だ。そうではなく、押しつけられる身体がある意図をもっているような動きをするのである。
（痴漢……？）
巧妙に電車の振動にあわせながら、密着した身体をこすりつけてくる。コートを通しても、彼――チラッと視線を後にやって男であるのを確認する。新聞紙で顔は隠していたが――の股間がヒップの丸みにぶつけられるのがわかる。今のところ、手の侵略はない。しかし下車する駅は遠いので不快な気分はつのった。
また駅につき、少しの乗客がおりて、大量の人間が乗りこんできた。圧力が増し、車両の真ん中にいた真弓はもみくちゃになりながらかなり後のほうへ追いやられた。連結器の部分に近いところだ。新聞紙の男はぴったりと彼女の後に貼りついていた。左側にほんの少し空間ができていたので、それを利用して逃げようと身体をひねった。男はそうはさせじと大きな身体を押しつけてく

る。驚いたことに左側からわざわざ人ごみを掻き分けて男が出てきた。彼は週刊誌で顔をおおっている。彼のおかげで退路はふさがれ、真弓は身動きができなくなった。右側は……あっ、と真弓は声を上げそうになった。そこにもまたスポーツ紙で顔をおおった男が迫っていたのだ。三方を得体の知れない男たちに固められてしまった形になる。

　彼らは皆背が高く、巨体であった。そのため他の乗客たちから隔離される格好となっているのだ。助けを求めるように前の座席に座っている客を見ると、なんと、真弓が視線を投げかける直前、彼もまた手にしていた単行本を顔面にもってきたのである。

　「……」

　これが偶然でないのは明白だった。チームを組んで痴漢行為を働く者がいる話は聞いてはいたが遭遇するのは初めてである。単純な痴漢ならよく被害にあっている。黙殺するか、毅然として声を放つか、状況に応じて使い分けているけれど、これはどうすればいい？

　突如、座っていた男が立ち上がった。下車する気かと思ったがそうではなかった。彼は彼女の前に衝立てのように立ち、前を開けているコートの胸を彼女の顔面に押しつけようとする。背広、ワイシャツ、ネクタイが目前に迫る。仁丹と防虫薬の匂いが鼻をついた。声を上げようとした瞬間、後の男が真弓の後頭部をもって思い切り

前へ押した。
「……あぅ……」抗議の声は苦鳴に変わった。鼻がつぶれ、唇がふさがった。タイピンが頬骨に痛い。頭に血が昇り、パニック状態に陥る。
吊り革をつかんでいた手を離し、前の男の腕をつかんで引き離そうとする。その手首はとられた。誰かはわからない。たぶん横の男だろう。指先が痺れるほどきつく握り締められ、ジリジリと腰のほうへ移動させられていく。アタッシュケースを奪いとられ、その手もまたがっちりと固定された。彼女にとっての攻撃の武器は足だけとなり、尖ったハイヒールの爪先で前の男の脛を蹴った。小さな呻きが男の口から漏れた。ヒールで誰だかわからないが、男の足をガンガンと踏みつけた。
その報復に握られていた手首に強烈な握力が加えられた。骨が折れそうだった。押しつけられたワイシャツにルージュが付着するほど真弓は口を開け、声にならない悲鳴を発した。
男の声が耳にささやく。
「おとなしくしないと、このまま丸裸にして放り出すぞ」
瞬間的にあの悪戯電話の声と比較していたが、判断はつきかねた。ギガス・エンタープライズの面々の声とも検討したが、どうだろう。わからない。
男の脅し文句を無視し、足蹴りを続行する。その足に

男の足がからんだ。男は自分の膝と膝の間に彼女の足を挟んで動きを封じこめた。手慣れた感じが恐怖をつのらせる。

この章の残りは有料本編でお読みください。######

男子の実力

肉体の切迫した異常に加えて、意外な人間の出現で、真弓の動揺は傍目にも滑稽なくらい激しかった。意味不明のところで異議をさしはさみ、裁判官にたしなめられ、突如、ボールペンを床に落とし腰を屈めて取りにいったり、条文を言い間違えたり、散々である。いつもの彼女を知る相手側の代理人は首をかしげっぱなしだ。そしていつもの真弓を彼よりも熟知している原口祐樹にとってはいっそう不思議な光景だった。
もっとも彼が彼女の法廷での仕事ぶりをウォッチするのはこれが初めてだから、確信があるわけではなかったが、真弓の様子の奇態さは素人目にもわかる。最初はふった愛人が職場に乗りこんできたことにショックを受けたのだろうとほくそ笑んだが、すぐに考え直した。彼女

はそんなやわなタマではない。海千山千の悪党どもを向こうにまわし、検事や刑事ともやりあい、マスコミをも賑わすような女である。自分の中澤真弓統御プログラムはまだ道半ばであり、だからこそすっぽかされてもいるわけで、自分の登場が彼女の頭脳を錯乱させるほどのインパクトをもっていると自惚れるわけにはいかなかった。

　じゃあ、なぜ？

　さすがの原口祐樹も真弓が電車内で襲撃され、陵辱されたあげく肛門に座薬型媚薬を挿入されて、その絶大な効力の爆発に火を噴くような苦悩をにじませているのだとは想像もつかなかった。ただ、彼女の顔の火照り具合や、汗の掻きようを観察すると、それはラブホテルのベッドのうえでの発情のおりの様子に酷似しているとは気がついた。

　（どうかしちゃったんじゃないの、先生さんよ）

　まあ、原因はともかく、今日の祐樹は自分をラブホテルに二時間も一人で滞在させ、恥をかかせた中澤真弓に軽く復讐する気持ちできたわけだから、何にせよ、彼女が苦しんでいるようなのは悪い状況ではなかった。

　彼は大学ノートを取り出し、膝において鉛筆を走らせはじめた。カリカリという音が静かな法廷に耳障りに響いた。彼はメモを取っているのではない。ノートのページいっぱいに真弓の裸体をデッサンしているのだ。見開

きの片側に身体の正面、片側に背面の図である。乳ぶさのかたち、腰の張り具合、陰毛の茂りかた、そして性器の構造まで、頭に焼きついている真弓の肉体図を描写していく。黒子の場所まで書き込んだ。
　それにしても、真弓が昨夜のような行動に出るとは意外だった。統御・管理プログラムは完了していないとはいえ、万事、順調だったはずなのだ。セックスも回数を重ねるほど激しく大胆になってきているし、彼女の意識における自分の存在も日毎、大きくなっているはずだった。彼女は躊躇しながらも、それを受け入れていた。これまでの経験からいけば、もう結末へ向かってレールのうえを走っていくしかないのである。麻薬を一人で断つのが不可能なように、ここから脱線するのは女には無理だ、と確信していた祐樹なのだが……。真弓から自宅の電話が使えなくなった旨の連絡を受けたときから、いやな予感はあった。そして昨夜のすっぽかし事件である。あんな醜態は初めてだ。祐樹の自尊心は完全に傷つけられた。唾を吐きかけられ、嘲笑された気分。中澤真弓に対する感情が一段とドス黒いものに変化したような気がした。とりあえず、このおとしまえを付けなくてはならない。この原口祐樹さまの眉間に傷をつけるような真似をしたら、どんなリスクを背負うハメになるのか、しっかりと学ばせなければならない。二度と不遜な意識が起こらぬよう、厳しく躾ける必要があった。

　さっそく祐樹は名前をかたって彼女の法律事務所に電話をかけ、今日のスケジュールを聞き出した。そしてここへ乗りこんできたわけである。だが、祐樹にも明確な計画があるわけではなかった。まさか、ここから野次を飛ばすわけにもいくまい。裁判の進行に応じて策をひねりだそうと思っていた。
　スケッチの背面図の臀部のちょっと上、尾てい骨のあたりに黒子を印す。赤鉛筆に持ちかえ、性感帯をチェックしていった。
　内心、ニタつきながら代理人席の真弓を眺めやる。汗で照り光った美貌。あの理知的な顔が俺の×××を舐めているときにどんな表情になるか、ここにいる連中に教えたらどんな顔をするだろうか。
　（畜生、真弓め。ただではおかんぞ。お前はもう俺の女なんだからな。わがままは絶対に赦さんぞ）
　左の乳ぶさに赤点をつけて祐樹は咳払いした。
　真弓はビクリと首をもたげたが、祐樹のほうには顔を向けず、ゆっくりと挙手した。　肉の苦しみは限界に達していた。失禁しそうなくらい、ドロドロに蕩けている。
　「……裁判長」
　「なんですか、中澤代理人？」
　「開廷後、九十分がすぎようとしています。証人の緊張と疲労は限界に達していると思われます。ここで十五

分間の休廷を申し出たいのですが、いかがなものでしょう」
　「それはかまいませんが、休息をとったほうがいいのは証人とともに、代理人、あなたご自身もじゃないですか」
　裁判官はニヤニヤしながら皮肉を言い、法廷内にひからびた笑いが起こった。裁判官は調書をぱたりと閉じ、休廷を宣言した。
　真弓は依頼人の腕をとって慰めの言葉をかけながら、祐樹に背を向けつつ法廷の外の廊下にでた。
　「先生、お身体、大丈夫ですか？」
　「ン？　ええ、なんともないわ。とりあえず控え室で休んでいて。中庭にでて外の空気を吸うのもいいでしょう。私はちょっと向こうの弁護士に探りを入れてきますから」
　言葉は弁護士としての威厳を損なわないように落ち着いていたが、腹の底では一刻も早くトイレへ走っていきたくてウズウズしていた。
　じゃ、と別れ、彼が廊下の角をまがって見えなくなると、真弓はヒールを鳴らして駆け出した。浣腸液を注入したときの快感を想像すると、眩暈がしてくる。女子トイレの赤いマークが目にはいると、叫びたくなった。きっとヒップ全体がツルツルのゆで卵のように汗で濡れてるだろう。

以下は有料本編でお読みください。
######